

在宅ターミナルケア

「最後は慣れ親しんだ自宅で過ごしたい」「家族を自宅で看取りたい」

病気がもう治らない、命に限りがあるとなった時、こんな風に考える方もいらっしゃると思います。しかし、いざとなると何をどうしたらよいかわからない、サポート体制や急変時の対応に不安があるといったことから、病院や施設での最期を選択する方も少なくありません。では、実際に看取るといったことはどういった経緯をたどるのでしょうか？

①衰弱 …残された時間が週単位から日数単位となると、様子に変化がみられます。

- ・うとうとしているが、呼ぶと目を開けて反応する。
- ・食事の量が減り、頬や目のやせが目立つようになる。
- ・わけのわからないことを話し、興奮して手足を動かしたりする。
- ・便や尿の失敗をする。

②最後の踏ん張り

体内に残った蛋白などをすべて燃焼し、エネルギーに変えて、家族と会話をしたり、食事をしたりなど、最後のひと時を楽しまれることがあります。この時期は改善ではなく最後の踏ん張りであることを家族に伝えます。

③呼吸状態の悪化

- ・読んでもさすってもほとんど反応が亡くなる。
- ・大きく息をした後、しばらく呼吸が止まって、また息をする波のような呼吸になる。
- ・顎を上下させる呼吸になる。下顎呼吸という最後の呼吸です。苦しそうに見えるかもしれませんが、ご本人はすでに意識はなく苦しみはありません。



訪問看護ステーション マザーでは癌や老衰の他、心疾患や呼吸器疾患、神経難病など、疾患の種類にかかわらず、終末期を在宅で過ごしたいとお考えの方のサポートを24時間365日体制で行っています。

何をどうしたらよいかわからない、介護できるか不安、まだ迷いがあるといった方のご相談もお受けしていますので、在宅療養をお考えでしたらぜひ一度ご相談ください。